

伝統と革新

沼尾 利郎

平成 25 年 4 月 2 日、東京・銀座の歌舞伎座が 3 年間の建て替え工事を終えて、装い新たに開場しました。400 年以上の歴史を持つ歌舞伎は、日本を代表する伝統芸能として世界無形文化遺産にも登録されています。皇室の雅楽、幕府や大名が保護した能・狂言とは異なり、江戸の歌舞伎は庶民のものでした。歌舞伎の語源は古語の「傾（かぶ）く」であり派手な衣装や奔放な行動を示す言葉ですが、近年は単なる古典継承ばかりでなく現代劇にも通じる新鮮な演出を導入して、古い伝統に新しい要素を積極的に取り入れてきました。演目は常に進化しており、古典と新作、「変わらないもの」と「変わりゆくもの」が共存するところに、伝統と創造の総合芸術である歌舞伎の魅力があるようです。まさに「伝統は革新の連続である」といったところでしょうか。

「古くて新しい」と言えば、国立病院機構（NHO）宇都宮病院も歌舞伎と同じ状況にあります。当院は平成 5 年に 2 つの国立療養所が 1 つに統合され、平成 16 年には NHO と組織も改変して現在に至っています。旧療養所のうちの 1 つは昭和 4 年に宇都宮市立療養所として現在「とちぎ健康の森」がある場所に創設されており、当院は今年で創立 84 年ということになります。病院の長い歴史の中では経営的に大変厳しい時代もありましたが、職員の意識改革や診療内容・診療体制の大幅な見直しなどにより、最近では 5 年連続黒字経営という結果を出して医療の質の向上にも一定の成果をあげています。医療は時代や社会情勢により求められるニーズが常に変化するため、歌舞伎と同じように変わり続けていくことが必要なのです。

ところで、今回の 5 代目歌舞伎座を設計したのは建築家の隈^{くま} 研吾さんです。隈さんは世界的に有名な建築家であり東大教授でもあります。栃木県には「石の美術館」（2001 年 インターナショナル・ストーン・アーキテクチャー・アワード受賞）や「那珂川町馬頭広重美

術館」(2001年 村野藤吾賞、林野庁長官賞受賞)など、氏の代表作と言われる建物がいくつもあります。「石の美術館」は昭和初期に建てられた古い石蔵を再生したものです。現代建築では石という鈍重な素材は敬遠されがちですが、暖かでおだやかな表情を持つ地元の芦野石を薄く切って積み上げる「石格子」という斬新な工法を用いてギャラリーが造られており、外の光が直接室内に差し込み独特な空間を演出しています。また、日本初の石造りの茶室は異なる温度で焼いた芦野石や白河石を使用しており、不思議な素材感が感じられます。一方、「広重美術館」の屋根と外壁は地元の八溝山で取れるスギ材のルーバー(格子)で覆っていますが、このルーバーは遠赤外線くん煙熱処理をした後に難燃剤を浸透させて不燃化させたものです。これら2つの建物とも建築上の手間は通常の何倍もかかっていますが周囲の自然と調和した大変美しい建物であり、現地で現物を見ると「どこにでも通用するものではなく、その場所でしかできない特別な建物を作る」という建築家の強い意志が感じられました。

隈さんは1954年(昭和29年)生まれで1956年生まれの私とほぼ同世代ですが、バブル経済がはじけてから東京での仕事が全くなり、自身の作品も評価されずに20世紀最後の10年間を失意の中で過ごしました。そのような不遇の中で地方の小さな仕事に対しても手抜きをせず、逆境の中でも妥協しないで自己主張(批判と反骨精神)を貫き通しました。建築家としての隈さんの偉大さは私にはわかりませんが、氏の言葉には地域医療の実践にも通じるものがあります。

「何かが生まれるプロセスを、真剣な思いの人たちと共有したい」(隈 研吾)

建築と言えば、当院の新病棟建設の工事契約がすべて終了してよいよ工事が始まります。平成26年12月には6階建て・免震構造の建物が使用可能となる予定ですが、建築を請け負う会社は歌舞伎座を建てたのと同じ清水建設に決まりました。伝統建築の技(匠の技)と最新技術の融合では定評のある会社ですので、新病棟の完成が今から本当に楽しみです。